

7月 市研 研究会記録

〇1年実践提案

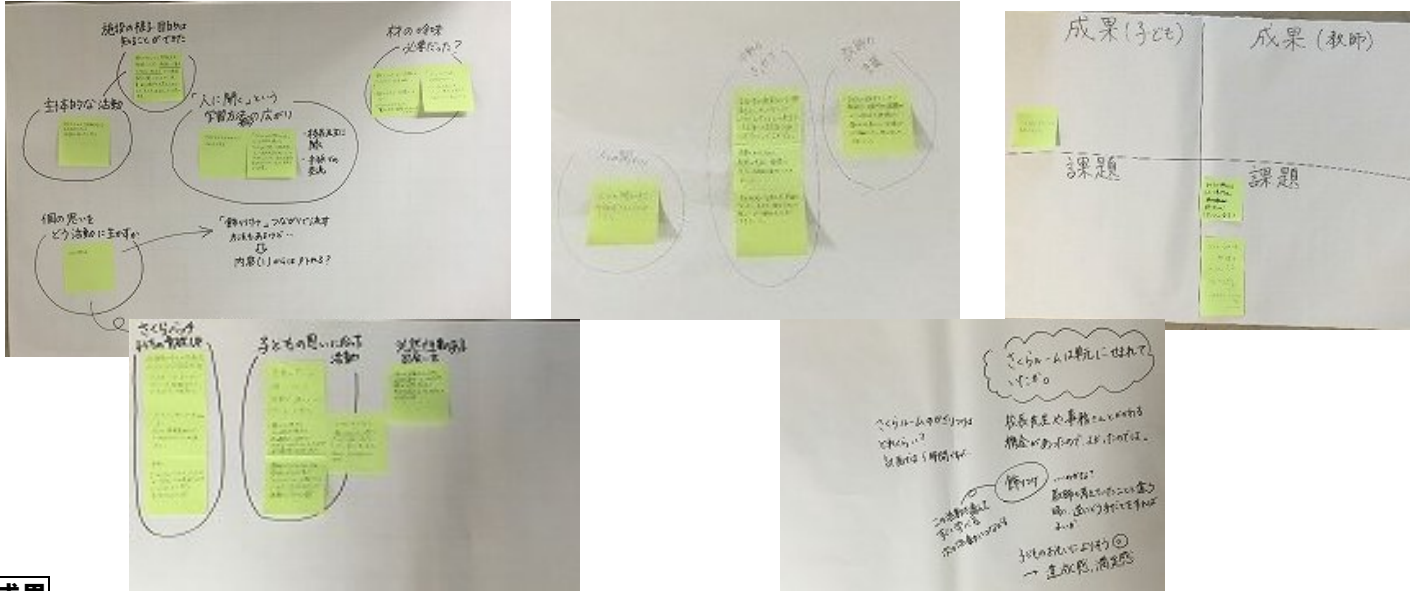
単元名「さくら たんけんたい」

授業者 瀬谷さくら小学校 樋口麻美先生

自評より問題提起・・・さくらルームの飾りつけという活動は、生活科の内容(1)において有効であったか。

〇ワークショップ

授業者があげた問題点を中心に各グループでワークショップを行った。



成果

- ・主体的に取り組める活動内容であった。
- ・自分たちがこの学校の一員であるという証を残すことができる。
- ・誰かに聞く、という学習方法を知るというきっかけになった。
- ・子どもの思いに寄り添った活動であったと思う。
- ・さくらルームを飾ることを通して、教室の使われ方、飾るためにどのような活動をすればいいのかの思い、他の教室への関心など、子ども達の視点が広がっている。
- ・さくらルームを飾ることを通して、学校の施設はみんなのものであること、学校のきまり、マナーの存在に気付けるよう、学びが広がっていったと思う。

各グループからの質問等

- ・相手から聞いたことが自分のものになっていたか。
- ・全員同じ場所を探検することで、個々の興味が薄れなかったか。
グループ別の活動を取り入れる必要はなかったかではないか。
- ・共有の場、人との関わりはどのようにもっていくのか。
- ・やはり、飾るための道具を教師が準備したことは残念だった。事務の先生と関わるチャンスだったのでは。

〇講師 石川先生より

1年生の子どもにおいて、同じ課題をずっと追いつけるということは困難なことがある。しかし教師が「出と待ち」のアンテナを常に立てておくことで、子どものきっかけを逃さないことができる。

教師が頭の中でウェビングマップを作っておくことで、子どもの具体の姿を明確につかみ取ることができる。子どもがどこでつまずき、何を留意すればよいか類推することができる。また、長期的な視点で身に付けさせたい資質能力が見えてくることにもつながる。

今回の提案において、「飾りつけ」を通して、何を身に付けさせたかったのかという思いが、担任にあったかということが大切。子どもをどんな姿に育てていきたいのか、意識して活動に取り組んでいけるとよい。